

ヘッダ・ガーブレル

Hedda Gabler

小劇場

●前売開始：2010年7月19日（月・祝）

作：ヘンリック・イブセン

翻訳：アンネ・ランデ・ペータス／長島 確

演出：宮田慶子

出演：大地真央／益岡 徹／七瀬なつみ／羽場裕一／山口馬木也／青山眉子／田島令子

企画意図

「JAPAN MEETS… —現代劇の系譜をひもとく—」シリーズの一作目は、宮田の中で長い間温めていた作品『ヘッダ・ガーブレル』。イブセン作品の中でも最も現代的と称されるこの作品を、新たにノルウェー語からの新訳に取り組み、芸術監督就任1シーズン目のオープニング作品として満を持して取り上げます。

くしくも、2010年1月にはノルウェーでイブセン戯曲の決定版全集が世界に向けて出版される予定です。秋の上演台本はこの決定版戯曲を再検討し、現代の『ヘッダ・ガーブレル』として甦らせたいと考えています。

『ヘッダ・ガーブレル』は、1890年12月に出版（スカンジナビア全土、フランス、イギリス、アメリカ、ロシア、オランダで同時発売）、翌年1月にミュンヘン・レジデンツ劇場で初演されました。2月にはクリスチャニア・ノルウェー劇場にてノルウェー初演。その後、世界各国で上演されています。

将軍の血をひくヘッダ・ガーブレルの、贅沢で一見自由奔放に見える生き方と、その一方で心の中に抱える不安、不満、言いようのない焦燥感、文化的背景の違いが、夫となるイェルゲン・テスマン、天才肌の文化史学者エイレルト・レーヴボルク、ブラック判事らとのやり取りから窺える作品です。この登場人物たちの生き様、その人間関係の様相は、自己中心的で、逆に閉鎖的になり始めている現代社会に生きるわれわれ現代人に強く響き、問いかける作品です。

作品

ガーブレル将軍の娘ヘッダは美しく魅力的でプライドが高い。文化史専攻の研究者であるイェルゲン・テスマンは彼女との結婚を強く望み、願いをかなえる。

舞台は、二人が半年におよぶ長い新婚旅行から帰ってきた新居の朝から幕をあける。

同じころ、若いころよりテスマンのライバルであったエイレルト・レーヴボルクが街にやってくる。彼は、ヘッダの古い知り合いであるエルヴステード夫人と共同で論文を執筆していた。テスマンは純粋にレーヴボルクの才能を評価し、ヘッダはふたりの関係に苛立ちをおぼえる。

ある日、レーヴボルクがその論文を落としてしまう。テスマンがそれを拾い、持ち帰ったが、ヘッダはそのことをレーヴボルクに隠し、論文を燃やしてしまう。絶望したレーヴボルクは、ヘッダからピストルを渡され、自殺する。

テスマンとヘッダの友人であるブラック判事は、そのピストルがガーブレル将軍のものであると知り、それをネタにヘッダに言い寄る。

一方、テスマンはエルヴステード夫人と、レーヴボルクが残したメモを頼りに彼の論文を復活できないかと尽力する。家族や友人たちの充実した生き方を目の当たりにしながらヘッダは悲劇的結末を選ぶ。

翻訳家からのメッセージ

アンネ・ランデ・ペータス

新国立劇場の『ヘッダ・ガーブレル』の上演では、在日ノルウェー大使館も劇場もノルウェー語の原本からの新訳であることを強く望んでいました。私の翻訳をドラマトゥルクの長島確さんが再確認し、必要なところは直してもらうことになります。長島さんはノルウェーの現代劇作家ヨン・フォッセと親交があり、以前彼の作品を共訳しています。長島さんとの共同作業は私にとってすばらしい経験の連続であり、とても勉強になりました。

『ヘッダ・ガーブレル』はすでに6回も日本語に訳されているそうです。イプセンの戯曲をノルウェー語から直接翻訳した二人の偉大な翻訳家、毛利三彌先生や亡くなられた原千代海先生による素晴らしい翻訳がすでにあるのに、私が新しく翻訳する意味はどこにあるのでしょうか。コンテンポラリーな、現在使われている言葉を使用してほしいという宮田さんの要望が、私にとっての一番重要な指針となっています。今の日本人がイプセンの言葉にできるだけ共感できるようにするにはどう表現すればいいのかを考えながら訳しています。原先生が一番気にかけていた作品『ヘッダ・ガーブレル』を翻訳する機会に恵まれたことは、日本で言う「なにかの縁」なのではないかと思います。ひょっとして原先生もどこかから見守ってくださっているのではないかしら？

翻訳家からのメッセージ

長島 確

戯曲の翻訳がとてもデリケートな問題をはらんでいることを、いつも感じています。翻訳とはそれ自体ひとつの解釈であり、演出的判断を多分に含んでいるものです。優れた小説の翻訳は、優れた翻訳家の演出的手腕によって成り立っています。しかし戯曲の場合、翻訳者とは別に、演出家がいるわけで、話が複雑になります。翻訳者が事前に下す判断は、演出家や俳優の仕事の可能性を、いちじるしく狭めることにならないのでしょうか。

でも逆に、もし翻訳者が独断でいろいろなことを決めずに、原文のもつさまざまな可能性を演出家や俳優に向けて開き、共有した上で、丁寧な共同作業ができるならば、翻訳から上演のプロセスには、驚くほど豊かな創造の余地があるといえます。

日本の近代劇は翻訳劇とともに始まったといえますが、いまあらためて、演劇における翻訳のあり方を問い直す時期に来ていると思います。今回、イプセンの新訳の機会を与えられ、演出の宮田さんとも解釈や人物造形について十分な意見交換をしながら、共訳者のアンネ・ペータスさんと作業を進めています。奇をてらうのではない、けれど確実に新しい翻訳がお届けできることを願っています。

演出家からのメッセージ

宮田慶子

『ヘッダ・ガーブレル』は、同じくイプセンの代表作として知られる『人形の家』の11年後に執筆されています。“家庭や結婚からの女性の自立を唱った作品”として、この二作品は同系列に考えられることが多いようですが、11年の時の流れを受けて、実は、その女性観は大きく変容しています。題名でもある『ヘッダ・ガーブレル』は、彼女の旧姓であり、敬愛する、誇り高き軍人であった、父・ガーブレル将軍の名を残しています。そして、ヘッダの自殺という衝撃的な幕切れは、変わりゆく時代そのものに、敢然とNO!を突きつけた、個の尊厳に立った、更なる“新しい女”の生き様でもあります。それはもはや、男女の別を超えた、人間としての、意志や信念であるところに、深い魅力を感じます。「信じる」という言葉さえ不確実になってしまった今、信じるものを守り続けようとしたヘッダのドラマに、真正面から取り組みたいと思います。

ヘッダ・ガーブレル

ヘンリック・イプセン

Henrik Johan Ibsen

ノルウェーの劇作家。1828年生まれ。近代リアリズム演劇を確立したイプセンは現代演劇の父とも言われ、シェイクスピア以後、世界でもっとも盛んに上演されている劇作家とも言われる。50年に第1作目『カティリーナ』を発表。代表作に『ペール・ギュント』『人形の家』『野鴨』『幽霊』『ロスメルスホルム』『海の夫人』『ヘッダ・ガブラー』『小さなエイヨルフ』などがある。生涯26編の戯曲と詩集を1篇残している。1906年没。



アンネ・ランデ・ペータス

Anne Lande Peters

演劇研究家、翻訳家。ノルウェー人。神戸生まれ。宣教師である親とともにノルウェーと日本の間を往来して育つ。翻訳に三島由紀夫『近代能楽集』のノルウェー語版、ヨン・フォッセ『僕は風』の日本語版がある。早稲田大学およびライデン大学にて「落語における女性」の博士論文を執筆中。現在、夫と子供三人とともにベルギー在住。

長島 確

Nagashima Kaku

ドラマトウルク、翻訳家。立教大学フランス文学科卒。ピーター・ブルック作品の字幕操作を機に、戯曲の翻訳に取り組み始める。現在、日本でまだ数少ないドラマトウルクとして、コンセプトの立案から上演テキストの編集・構成まで、身体や声とともにあることばを幅広く扱う。ベケットやサラ・ケイン、ヨン・フォッセらの戯曲の翻訳のほか、さまざまな演出家や劇団の作品に参加。参加作品に『アトミック・サバイバー』（阿部初美演出）、『死のバリエーション』（A・コーベ演出）、『44 マクベス』（中野成樹演出）、『4.48 サイコシス』（鉛屋法水演出）ほか多数。訳書にベケット『いざ最悪の方へ』。2008年、阿部初美らと創作レーベル「ミクストメディア・プロダクト」を始動。東京藝術大学、立教大学、京都造形芸術大学非常勤講師。



宮田慶子

Miyata Keiko

※ P2 を参照